

海外薬学実習を通して学んだこと

薬学部 5 年

海外薬学実習を通して、アメリカの薬剤師は患者からはもちろん、他の医療従事者からも高い信頼を得ていると感じた。薬局のクリニカルルームでの血糖値、HbA1c、PT/INR、骨密度の測定、他にも糖尿病の患者に対しての食事指導など、患者に深く関わることで、患者からの信頼を得ているのではないかと感じた。また、ワーファリンクリニックでのプロトコールに基づいた投与量の調節などは、薬の専門家として薬剤師がファーマシューティカルに深く関わることのできる領域で、アメリカの薬剤師は治療において他の医療従事者から高い信頼を得ていると感じた。

日本の薬剤師とアメリカの薬剤師を比較すると、アメリカの薬剤師の方は、より臨床に近い仕事をしているという印象を受けた。日本の薬剤師とアメリカの薬剤師の役割の違いに大きな影響を与えているのはテクニシャン制度によるものだと感じた。テクニシャンがいるからこそ、調剤業務に時間を費やす必要がなくなり、薬剤師本来の処方鑑査、服薬指導などの薬の知識を使った業務を行うことが可能になり、薬剤師の専門性を活かし、患者にとってより良い医療を提供できると感じた。今回の実習を通して、日本でもテクニシャン制度を導入すべきだと強く感じた。

また、大学で実際に講義を受けさせていただき、特に印象的だったのがガイドラインに基づいた授業を行っていることだった。これまで、日本で講義を受けている際にガイドラインなどは参考にしていなかったが、学生のうちからガイドラインや文献等を参考にして病態などを学ぶことで、病態に対する理解も深まり、実際に現場に出た際にもエビデンスに基づいた医療を行うことが可能になるのではないかと感じた。今後はガイドライン等を参考にして学習する癖をつけていきたい。

海外薬学実習を通し、日本とアメリカのそれぞれの医療、教育、保険などの相違点、良い点、問題点を知ることができた。この経験を活かし、患者のために何が出来るとかを考え、積極的に医療を行う薬剤師を目指したいと感じた。

有意義な実習を経験させていただき、ありがとうございました。